太極究竟眞

しづや　りふかふ

彝玖邇（いくに）の王イ・ユヰヒ・ングユが眞神（まがみ）の国を統治していた時代、世界の様相は今とはまったく異なっていた。

さもありなん、数千億兆個もある、十一次元の時空（時間一次元・空間十次元）に存在をなす宇宙世界らは、情報生命であるがゆえに、彼らの心機が動けば、人の心に於いては、異なる世界を映し出すものである。

さて、時は西暦紀元前８０００年のころ、今から約一万年前であった。

ヒト属が２６０万年前に礫石を打ち缺いて造ったチョッピングツールを使い始めてから途方もない歳月が流れていたが、人類の進歩は今日的に見れば微々たるものであった。

それでも当時としては最新の武器であった銅の剣を有していたのみばかりでなく、鉄器をも鍛え、近隣諸族を圧した（という説がある）。

彝玖邇の在位、王の統治していた年代に関しては、さような特定がなされているが、眞神の国がいずこにあったかについては、未だ定かになってはいない。

ただし、王の統治から二千年後、第１０１代王であった彝久那斗（いくなと）の建てた帝都、斐圍良（ひえら）が現代エジプト領に相当するところから、そこから大きく離れた場所ではあるまいとするのが、大方の見解のようだ。

例えばアフリカ中央部とか（人類の起源である土地…？　大いなる妄想だ、いやはや、数百万年前にさかのぼるつもりだろうか！）。

とは言え、二千年も時間があれば、当時の移動手段であっても相当な範囲まで移動できる（可能性がある）こともまた事実である。

また他にも奇天烈な説として、全世界であったと唱える者もいた。それゆえに場所が特定できないのも道理である、と。

イ王は世界を統べていた、すなわち彝玖邇（イ国）とは世界すべてのことであったという説だ。（では、場所が特定できない邪馬台国は全世界であったのだろうか！　もし私が嘲笑気味にそう言ったとしたならば、「しかし、邪馬台国は少なくとも日本のどこかであると特定できるではないか！」と彼は反論しそうだ…）

その都には、巨大な究竟神殿があった。一番高い尖塔は雲を超え、時折、低めの絹積雲が過ぎって、壁を凍らせたという記録がある。鱗雲とも呼ばれるその雲の高度は概ね５から１５㎞だ。その高さをにわかには信じられないが、絹積雲が氷の結晶でできているという知識が投じなかったことを考えると、まったく笑い飛ばすこともできない（ような気がする…そうでもないか）。

壮麗なること、神の造り給うた宮居のごときその神殿には、最奥義室（最も奥にある原理真義の自然法爾が供養されている室）が中央の奥にあり、人知の及ばぬ太極究竟真イユヒ（一説に〝イヰ〟。彝配非。ＩＹＨ）が祀り収められ、荘厳され、奉られ、護られていた。

それは神（カム）〝彝而呬厨御（いあれずを）〟と同一である。「同一」という規格が神に適合されるものであるとすれば、の話であるが。

国も神殿も神授の教理も、イ王が一代で世に知らしめたものである。
誰もが知らぬことかなわぬゆえに誰にも知り得ぬと謂われる人知到達不可能な真理は超越的な神意識でしか捉えられないが、王は方便として四つの真理に分けて提示さえ、人の変容を援けていた。それら四真理はそれぞれが一室を持っている。言うまでもないことだが、実はこれらの意味は同じである。
真理は存在しない。事実が現実である丈(だけ)である。

一つは、〝執著を捨てよ〟。　不著(ふぢゃく)の室。
一つは、〝汝の敵を愛せよ〟。　睿愛の室。
一つは、〝真人は横変死人也、即ち清明躬に在れば氣志神の如し〟。　清明の室。
一つは、〝真神全知全能にしあらば異教背教なし〟。　真神の室。

それぞれの室を護る者は世襲であった。
不著を護る者は大貴族アマノ家の支家にして天神官なるユイア家。
睿愛を護る者は求道者なる使徒アルカディロン家。
清明を護る者は永劫哲学大学長にして聖武士団長なるウイ家。
真神を護る者は皇統の半神族エイオン家。
王は毅然と坐し、香油を塗った黒髪に、真実の双眸、その燦々たる炯きは太陽さえも漆黒の闇に見えるほどであった。鬚を蓄え、体躯は優れ、桂冠をかぶり、金剛石の首飾りにイユヒの象徴を飾り、金の指輪には聖句を彫り、ベルトには太極究竟真の徴を刻んだバックルを附けていた。金糸の刺繍が施された貫頭衣を着て、サンダルは鰐の皮であった。玉座は一個の黒い大巌から彫ったもので、碧玉紅玉白金翡翠紫紺席で荘厳されている。その一切は神的で聖なる光に包まれつつも熾えるように強い光線を放つ。
玉座の前には四神なる各家の者らが集まっていた。

天神官ユイア・イハ・ユイシェスは黄金の鎧に武装して濃い紫のマントを羽織っていた。佩く剣イクシス(IQCS)はオリハルコンを鍛えたもので、刃丈(だけ)で長さ２ｍ、その幅は剣先付近が最も幅広で最大４０㎝であった。この大剣を扱うユイシェスは身の丈１６０㎝、１４歳の女性であった。鮮やかな碧眼白皙に金髪で、すべてが強烈に耀いているとは言え、その躰はとても華奢で、どこにこの超膂級の剣を自在に振るう力があるのか不可思議であるが、神技と謂われる所以である。

求道者なる使徒アルカディロン・リグヴェイ・リュは背の高い痩身の若者で、髪も鬚も伸び放題、伝統に遵って襤褸布を継ぎ合せて造った袈裟を引きずり、木の実で作った数珠をにぎって素足である。そのまなざしは暖かく限りなく優しく、すべてを抱擁する海のようであった。

永劫哲学大学長にして聖武士団長ウイ・ソイュートゥール・ユウホウは青白い顔の少年で、遥かなる眼を持ち、顎も鼻梁も怜悧で、物憂げなニヒリストの相貌を持っていた。全

身を黒いケープで覆い、黄金の光を放ち紫の雲を漂わせる長さ３ｍの杖はそのまま三叉戟として使えるもので、神聖文字で〝生存を勿みする〟と刻まれていた。

皇統の半神族エイオン家の者は神と人との間に生まれたエイオンの末裔で代々完全なる肉体を持つ、すなわち両性具有である。かつては皇帝として国々を治めていたが、天神の怒りに触れ、流浪の身となり、王イ・ユヰヒ・ングユの臣下となってから、再び栄光を取り戻していた。エイオン・エル・エアは黄金の皮膚を持ち、瞳は黄金で瞳孔が青い、爛々と燃えるようで、黄爛と呼ばれていた。犬歯が長く、髪は陶磁器のようなクリムゾンレッド、たっぷり襞を寄せて２ｍ以上も引きずる鮮やかな緑色のトーガを着ている。

王は言う、

「さて、卿らに集って貰ったのは他でもない。

既に承知のとおり一事を以て万事とし、大枠ですべてを一緒くたに扱う大罪は、この世の悪辣の内でも最も悪しきものであり、さような愚昧の者どもを撃ち滅ぼすことこそが、世界を統治する王の務めとかねがね考えるが、朕も遂に決意し、低劣なる者を滅ぼすべく、戦を始める時なりと、思料するに至った」

一事を以て万事とし、大枠ですべてを一緒くたに扱う大罪、これは『同一視大罪』と呼ばれ、国家・宗教・民族単位で、あたかも一人格であるかのごとき認識を抱くことであり、非科学的で、事実に基づかない（すなわち真実ではない）妄想であり、悪辣愚昧低劣な罪悪である。

たとえばある宗派の異教徒が他の異教徒を殺したとき、被害を受けた宗派の者が加害者の宗派の者すべてを復讐の対象にすることである。又は或る国の王が戦争を仕掛けたときに、被侵略国家の国民が侵略国家の老若男女すべてを侵略者として憎悪する罪のことである。又々は或る特定の民族を個人の差異を無視して排斥しようとする愚劣を指す。

罪は常に意思や行為に起因して在り、すなわち個人に帰する。それを国家・宗教・民族単位で取り扱うことは事実実態に即していない。真実ではない。人は個々人で異なるのが事実実態である。同一視は事実実態に即さない。愚劣であり、悍ましく残虐で矯激な復讐の連鎖を生んでしまう大罪である。

直截加害者でない者が報復に遭ってしまったならば、報復された家族の者はどう想うであろう。何の罪もないのに殺されてしまった！　そう想うであろうことは必定だ。その憎悪たるや天をも焦がす怖ろしいものとなるであろう。報復に対するさらなる報復がいかに無差別で苛烈なものになるかは想像に難くない。

事実実態に即して言えば、国家・宗教・民族というものは思惟上のものであり、極論すれば妄想の一種である。そのカテゴリーはとても曖昧で大雑把なため、到底精密な事実実態に即することはない。

「朕は国家・宗教・民族を否定しないが、過度に依存することは大罪の温床となると知る。人は良く気を附けるべきなのだ。よく気を附けて噛み析き、深く思慮し、多くの情報を持って客観的に観察し、事実実態に即して思惟するべきなのだ」

「御意」

四神は声を揃えた。
軍は進む。イシルに着いた。
イシルの豪族トクゥーは異教徒であるリゥクコ人に侵略された歴史を恨んで「奴らは領土を奪い、我が民族の処女数十万人を凌辱した」と叫んで弾劾し、奴隷商人を装って幼い少女らをリゥクコ人に売り、大金を儲けるとともに、「処女は自らを武器として民族の尊厳を守れ」と唆し、処女らが初夜に短剣を隠し持って主人を殺すようにあらかじめ洗脳していた。無差別殺人。むろん少女らは死刑に処されるてしまう。
年端もいかない少女にやらせて自らはぬくぬくと生き延びている醜さよ。
「リゥクコ人は悪である。排斥すべきである。彼らは幼い少年少女や嬰児までもが領土欲に渇き飢えて虎視眈々と他人の土地と処女と財宝とを狙い、殺戮の意欲に燃え、略奪欲に身を焦がし、爛々たる邪悪な眼を輝かせている。民間人の殺戮も辞さない、大虐殺民族で、世界の悪鬼だ」
妄想である。事実実態に即していない。大袈裟な言葉はすべて嘘だ。真実は鳩の脚で来る。
リゥクコ人も黙ってはいない。大軍を率い、一斉砲撃によって罪のないイシルの村を殲滅させた。それも一度や二度ではない。数十に及んだ。そのたびにイシルの民も憤激する。煽動家が街頭で演説し、さらなる無差別殺戮が燎原の火のように広がる。
悍ましき民族浄化までもが起こった。
イシルに洪水と噴火が起こったときには、リゥクコ人は民族の祝祭日のように歓呼し、祝杯を挙げる。イシル人の少年アフは家出して港で無抵抗のリゥクコ人家族を殺し、民族の英雄と称賛された。町は嫌悪すべきヘイト・スピーチであふれる。
イシルの軍隊が眞神の軍を迎え撃たんとして街道を昂然と進み、天神官ユイア・イハ・ユイシェスは黄金の鎧と濃い紫のマントで颯爽とあらわれ、３００万の軍を率い、大剣イクシス(IQ CS)を振るった。
神威を帯びた剣は空を切るだけで雷霆のように轟いた。彼女の碧眼が強く熾炎し、それはあたかも神の怒りの鉄槌のようであった。
イシルの軍は大混乱に陥る。彼らの軍は５万であった。
ユイアの率いる黄金翼のある軍が光の潮のように圧倒し、すべてを飲み込む。哀れ、イシル軍は潰走した。ようやく安全な土地にまで逃れると、彼らは誰も損なわれず、傷つかず、疲労さえしていないことに気が附く。
さて、求道者なる使徒アルカディロン・リグヴェイ・リュはイシルを迎え撃とうと殺気立っているリゥクコ人の陣営を訪れ、
「敵を愛せよ」
と言った。
できようものか。
当然、アルカディロンを囲んだリゥクコ人は怒り狂い、
「何だと、ふざけるな。家族や仲間を理不尽に殺されて黙っていられるか」
だが、そこにあらわれたるは、永劫哲学大学長にして聖武士団長なるウイ・ソイユートゥール・ユウホウ。厭世の三叉戟で襲い掛かる者どもを蹴散らし、冷笑する。
「ふ。すべては生存に起因するに過ぎないというのに」

五色の叢雲が天を蓋い、花びらの雨が降る。
リゥクコ人は忽焉と解脱した。
一方、豪邸の広大なバルコニーで処女に囲まれ、美酒に酔い痴れていた豪族トクゥーは突如、バルコニーの欄干に立つ皇統の半神族エイオン・エル・エアを見る。
「何者か、面妖な、貴様、その異様なる姿、悪魔め、我に神の加護ありと知れ」
そう喚いて黄金の方丈を振るった。
しかし青天の霹靂、偽りの王トクゥーは雷に打たれて斃れた。従者が慌て近附くも、既に息はなく、死んでいる。
エイオンは哄笑して緑のトーガを翻し、五色の雲に乗って去った。
イ・ユヰヒ・ングユ王は８００万の軍を率いてイシルとリゥクコの領土を縦断し、戦いの終結を宣言し、母相を解除した。
そして、「直截の加害者のみを裁くこととせよ。さもなくば同じ罪として処する」と布告した。
さらに１１００万の軍は世界各地を転戦し、世界各地の『同一視大罪』の者どもを撃ち滅ぼす。それは昇る黄金の旭日が夜陰を駆逐するがごとくであった。
彝玖邇の王は山上に立ち、衣を風に翻し、
「この大地に永遠の平和を」
さように輝かしく宣言した。

「さて、大いなる罪は貪・瞋・癡である。
貪りとは癒えることのない渇きであり、欲望である。必要以上に求めることである。過剰な色欲でもある。
瞋は怒り憎しみであり、身肉を燃やし尽くす苦しみであり、その苦しみゆえに人は怒り憎しみを発散せずにいられないのだ。
癡は真実を見ようとしない愚かさである。
ところで、それらの起源は生存の欲望にある。生存は存立の安寧を求めて、自己が肯定されることを望む。
人が自己肯定を望むのは、生存への意志によるものである。
自己の生命の存続や子孫の安全を求めるのも同じことである。男女の愛も子孫の安全を求めることにその起源を持つ。すべては生存に由来する幻影の価値である。生存の罠である。
古来、聖者が禁欲を唱えたのは、ゆえなきことではないのだ。
生存はすべての価値の源泉である。人を木の葉とすれば生存は大海だ。人はその表面に泛び揺蕩うのみ。
あゝ、超え難きかな。超えられよう筈もあろうものかは。すべての価値を勿みすことかなわざれば。大海の木の葉にしかざれば。
されど人、不可能を為せ。敢えて自己を超え、無へと裂けんとせよ。義しきと思うをせよ。心機の摩訶不思議を信じ」
彝玖邇之王イ・ユヰヒ・ングユがさように宣ったとき、天地は歓喜して芳しい蓮の花び

らが無限に降り、ヒマラヤ山脈をも埋め尽くし、その後に甘露の雨が降ってすべてを優しく軟し和らげ、天の音が流れて大地が喜びに震え、三千億兆の宇宙世界さらに三千億兆の宇宙世界さらに無限に無数の宇宙世界が光となり、ありとしあるもの、なしとしなきものまでも無際限にすべてが光燦となって、象りの枠なく、非想処非非想処なる融通無礙天真爛漫自在自由奔放天衣無縫、身も裂け砕け天翔け躍る、無枠の白き光となって涯しなく終わりなく晰らけく睿らかに強く鮮やぎ、太極究竟眞の眞神なるカム彝而呬厨御なる哉。

…むろん、僕には実行不可能ですが。これはフィクションであって、内容は本気ではありません。悪しからず。